教えられたり、酒を飲んだり

志村有弘（しむら くにひろ）
（相模女子大学名誉教授）

初めて教壇なるものに立ったのは、二十二歳のとき。学校を卒業して非常勤講師として週に十二時間、男子高校に出向いた。とはいえ、教えるほどの学問教養はまるでない。生徒に言うのは、せいぜい憎まれ口。一学期が終わるころ、生徒に、

「君たち、一年中、同じ制服なるものを着ていて、いやにならないか」

と訊いた。すると生徒がすかさず、

「先生だって、いつも同じネクタイを締めているではないですか」

と返してきた。そのとき、初めてネクタイは取り替えるものなのだということを知った。考えてみると、自分がどうしてネクタイを持っていたのかも分からない。あるいは父親から貰ったものであったろうか。その年の夏休み、故郷に帰った私は、父親のネクタイを数本貰って上京した。

大学三年になるとき、担任の先生から、「大学院へでも行くのであれば、教職課程を取った方がよい」と言われ、仲間の者四人と急遽、教職課程の授業に出るようになった。むろん、どうして取った方がよいのか分からなかったが、ともかく教務課に申告に行くと、「今から取得するのですか？」と呆れ顔をされた。普通、教職課程は二年生のときから単位取得してゆくのだという。それでも我々仲間四人は教育実習にも出て、何とか教員免許状なるものを取得することができ、三人は学校に勤めるようになった。他の一人は静岡の私立学校を紹介されたのだが、神奈川県の公務員になった。振り返ってみると、当時は明日のことなど深く考えない、呑気で、ズボラに生きることができた時代であったのかも知れない。

仲間の者に静岡県の私立学校の教員職を紹介した先生は、高校時代の成績は学校で後ろから二番目であったという。それで自分は勉強したらどこまで

行くことができるかと思い、懸命に勉強した結果、前から二番の成績を取ったので「自分もやれば出来るのだ、と自信を持った。それで再び、成績は後ろから二番目に戻った」と自慢（？）していた。もっとも、この先生はとかく偽悪癖があったようなので、どこまで本当であるのかは分からない。

私は中学・高校時代、バスケットボールと柔道を好んでいた。中学生のころは、町の警察の柔道場に通っていた。また、バスケットボールに夢中になっていたとき、ボールが手に吸いつくようになるように鍛練（？）を重ねた。その結果、バレーボールのクラスマッチで試合に出たとき、サーブを受けたボールが手に吸いついてしまい、相手のチームに点を与えるようになってしまった。

歳月が流れ、学校に勤めるようになって、生徒から、サーブを受けるときは、掌で受けるのではなく、両掌を軽く合わせ（交差させ）た形で重ね、手首の下（指に向かって）あたりで受けるとよい、と教わった。それでもボールが手に吸いつく感じもするが、掌で受けるよりはよいと思った。ともあれ、バレーボールのサーブの受け方。教え子に教えられたことである。

勤めをリタイアするころ、少しばかりワープロ、パソコンを利用するようになり、その結果、漢字を忘れてしまい、黒板に何か書きながら、「何々という漢字は、どんな字であった？」などと平気で聞いていた。生真面目な学生諸君は、ただちに電子辞書を引いて教えてくれる。しかし、陰では私の厚顔無恥にあきれていたと思う。

やはりリタイアするころ、成績もパソコンに入力する学校が多くなった。非常勤講師をしていた学校では、パソコンの置かれている部屋で成績を打ち込むようになった。学生諸君の一人々々にＡＢＣなる成績を入力してゆくのだが、慣れていないこともあり、入力し終わったとき、ひどい疲労感を覚えた。

私の知人に、某大学の非常勤講師をしている人がいる。小説を書いたり、民俗学の世界にも明るい人だ。ところが、私と同じくパソコンをうまく扱うことができないらしい。「成績の入力はどうしている？」と訊いたら、「学生の名前の横に手書きで成績を書き入れたものを職員に差し出し、入力してもらっている」と話した。そのことがよほど心の負担になっているものか、その非常勤講師先生は「ボクはどこでも生きていけないのです」と、無類の酒好きにはふさわしくない、いじけた言葉を発した。

知人であった作家の須知徳平（故人）は「小説を一つ書き上げると、何かを毟り取られたような疲労を覚える。だからそれを埋めるべく、普段は家で酒を飲んだり、旅に出る」と語っていたが、右に述べた非常勤講師先生は、「いじけた、疲労を感じた」と言っては、絶えず楽しそうに酒を飲んで自らを癒している。やはり酒は、百薬の長だ。

一種の統一が先づ与へられてゐる

志村栄至（評論家）

昨今は、テレビのCMタイムがずいぶん長くなったなあ、なんて思いつつ見ている。

しかし、そのCMの中には、感心しつつ見てしまうシーンが多々あり、捨てたものではない。例えば、幼児と両親との交歓、これなどは特筆ものだ。人間の幼児期のあれこれ、とりわけ親とのコミュニケーションの質こそ、重大視すべきと思われるからだ。

話は一転するが、小林秀雄に関する一風変わった話を取り上げる。これはかなり後になって知ったが、〝近代批評の開祖〟とまで百科事典に名を残すこの人には、亡くなる前に唯一、親族とか出版社に、単行本化を禁じた著作があったという一件だ。

それは昭和三十三年から、ほぼ五年間にわたって雑誌に連載された『感想（副題ベルクソン論）』だ。これを五十回余も書き進めたのに中断、以後、世人がその先を目にすることはなかったという。

ところがその同じ雑誌が、小林の生

誕百年を期して臨時増刊を発行、大局的な見地からと推測されるが、小林の遺言にあえて背いて、『特別公開』と銘打って、その主要部分を公開してくれた。

もちろん最大の関心事は、小林の憂慮は何処であったのかに集約する。それは小林の言、「日本の読者にベルクソンを誤解させる恐れがある」から判断するしかない。当然、諸々の見解が想定される。ところがそれは、読者各人の小林への接近の度合いが試されることでもあって、興味は尽きない。

と、前置きめいたことがやや長くなってしまったが、一人の亜流の独り善がりではないことを念じつつ、小林を悩ませたのはここではないかと指定してみたい。

「従って、哲学は、統一から出て来る道であって、統一に達する道ではない。」

としたその先で、こう書くところだ。

「ベルクソンは、素直に与へられた統一から出て来るのであり、統一そのものについて思ひ患ひはしない。一種の統一が先づ与へられてゐるのは、絶対的な事であるが、それは、彼といふ一種の生活体の統一が在るがままに有限であり相対的である様に、有限で相対的なものだ。それで何一つ不足したものはない。」

某出版社のご高配で、発禁状態から解放されたここを目にした時には、遂に見つけたかと妙な感動を覚えた。小林の最終的な人間認識こそこれだと思えたからだ。

ところで、同時に諸々を空想してしまった。あの小林にも、時間の経過は微妙に働き掛けたのかと。これでは、「統一へ達する道」、若い人間的努力を否定するのかと解釈されなくもないぞと。「一種の統一が先づ与へられてゐるのは、絶対的な事」は、小林以外の人の口から発せられることはない名句だが。

時は移り、小林が話題になることも稀れな世相となった。もったいないことではあるが、その責は小林にもある。後に、『ソヴェットの旅』という講演ではズバリ、こう発言したらしいが、文章ではこの単刀直入さが見られないことだ。

「私は、（中略）ロシヤの十九世紀文学に非常に世話になった。ドストエフスキイという作家を読んで、私は文学に開眼したのです。」

問題はそのテーマだが、著作からはなかなか理解し難い。この人に対する敬愛の念が無ければ放棄してしまう。ところが一転、講演とか対談、座談会では、案外、あっさりそれを喋ってくれている。以下はその象徴とも言える一節だが、雑誌が催した、〝小林秀雄を囲む座談会〟での発言だ。

「文学的に書かうとか、科学的に書かうとか言ふ事に迷って居る中は、まだまだ自分の書き度いものを本当に愛して居ない証拠だ。何と言ふのかなあ、詰り尊敬が足りないんだね。（中略）だからドストエフスキイを僕が書かうとする時、奴の方が偉いんだ。自分なぞの考へ得る事は、皆んな彼にあ

るんだ。だから彼に出来るだけ従って、彼の考へた事を書き残すまいと恐れる気持ち、さういふ気持ちだけで沢山なんだ。」（原文通り）

小林の肉声を真近かで聞くような生々しさ、臨場感すら感じてしまう。しかし、それより何より、「開眼した」とまで小林に言葉を使わせた大事が、自身の実体験に姿を変えてそれとなく語られていること、これを見逃すべきでなはいと思う。ともかくこの人は、大事なことを発信する時に限って、下世話を装う癖がある。生物の擬体を連想させなくもないと思うと、実に興味深いと思っている。

それにしてもなぜ、小林は判然と、人生の生きる大事を教えようとしなかったのか、ここにも、その思想の影の一つがある。それは言葉にし難いが、水が高所から低きに流れることにも似て、人間の間に上下を創り出すことではないか、これを自戒したと。傲慢という罪が想定されなくもないからだ。

ここで、ロシヤの先人の若き日に起こった悲劇的な顚末を拝借する。人間的な善意から邁進した行為の結末が、厳寒の獄舎での地獄の日々であったなら、この謎はどう解くべきかと。

小林の「一種の統一が先づ与へられてゐる」という人間認識が、この瞬間、一段と輝く。若く向上心が旺盛な時には、その向上心の真相とは自身の現状否定でもあるという負の側面に、気付けないものなのだと。向上心は青春の異名であり、美名でもあるが、これは残念ながら事実だと言いたい。

飛鳥時代の山城

屋嶋城

［やしまのき］

源平合戦の古戦場跡としても知られる高松市の観光スポット・屋島。平成10年、その山頂で歴史的な発見があった。日本書紀に記されている古代の山城「屋嶋城」の遺構が見つかったのだ。その後の調査で城門跡が発見されたことで、本当に実在したのか賛否の分かれていた「幻の城」の存在が、ついに証明された。

平成14年に発見された城門の石垣の様子。

飛鳥時代、亡国の危機感から中大兄皇子の命により築城された屋嶋城。その城門からは高松市街地が一望できる。

日本書紀に屋嶋城の記述が出てくるのは天智天皇六（６６７）年。当時の日本（倭国）は朝鮮半島の争いで百済に味方したが、６６３年、白村江の戦いで唐と新羅の連合軍に敗北する。その後、唐・新羅の連合軍が倭国に侵攻してくることを危惧した中大兄皇子が、要所に築かせた城のひとつが「屋嶋城」である。

屋島山頂に復元されたのはその城門。約６ｍの高さに積まれた石垣は、見る人を圧倒する迫力がある。朝鮮半島に残る同時代の城と同じ構造をしていることから、築城には百済の技術者が協力したようだ。１３５０年前、不便な山中にこれだけの建造物を人の力だけで作ったことは驚きである。

雨水が貯まらないように排水溝も備えられていた。

歴史ロマンが積み重なる屋島。

屋嶋城の城門の調査等に携わった埋蔵文化財センターの山元さんは、飛鳥時代の遺跡を実際に見られることに、大きな意味があるという。「高学年の小学生がたくさん見学に来ますが、目を輝かせながら話を聞いてくれます」。歴史の授業で習うだけでは遠い昔の話にすぎないが、実物を見れば興味がわき、想像が膨らむのだ。屋島には、源平合戦場や築城等に使用された石切場など、歴史の痕跡が何重にも積み重なっている。「歴史ロマンは屋島観光の魅力になる」と山元さんは期待している。

山元敏裕さん
高松市文化財課埋蔵文化財センター所属

高松市の歴史的なの発掘や保存にいくつも関わっている。

門の柱の跡が一部確認されている。

ユーカリ

中西美子

何気なくテレビを見ていたら恐るべきユーカリの生き残り戦略を知りました。オーストラリアは、山火事が頻繁に起こるとのこと、ユーカリの成分には、揮発性の油分あり、火に油を注ぐ結果となります。焦土と化した大地から誰よりも早く眼を出すのは、ユーカリだったのです。地下深くまで根を伸ばしたユーカリは、他の競争相手の追随を許さずオーストラリアを席巻することとなったのです。砂漠の緑化対策にも貢献しているようです。

古くからアボリジニは、ユーカリの抗菌作用などを利用して薬として使われています。現在は、一般的にアロマオイルなど広く普及しています。大量に生産されているようで、わりに安価ようです。青梅と同じような毒性のある成分も含まれており、使用には、注意が必要のようです。

コアラは、このユーカリの新芽を主食にしています。コアラが二十時間も寝ているのは、解毒に時間が必要だからです。他の動物が手を出さないユーカリを食べることで生き残って来たというわけです。まだ解毒出来ない赤ちゃんに母親は、排せつ物（パップ）を与えて解毒の酵素を伝えているそうです。千種類以上のユーカリの中でコアラが食べるのは、四十種ぐらいだそうです。以前以上に両者の関係は、特別なものに感じます。

ここに描いたのは、テトラゴーナという種でコアラの好物のユーカリだそうです。

ああ、市民講座九十

高橋和島
（作家・郷土史家）

毎月、配られてくる市の広報を、これまでろくに読んだことがなかったが、先日、なぜかその気になり、比較的丹念に目を通してみた。

以下は、岐阜美濃の人口十一万ほどの町の広報の話ながら、日本の地方都市は視察研修などを通じ、互いに学び合っている。したがって、全国に似たような町が沢山あるものと理解していただいても間違いないだろう。

さて、小さな活字がぎっしり埋まった代物はやはり退屈である。我慢して読まねばならなかったが、市民講座を紹介した頁を開いたところで、ふーんと声を出すことになった。

六十一の「オープンキャンパス」講座と三十の「プライベートカレッジ」講座が懇切丁寧に紹介されていたのである。

横文字に強く、クールと自認しているに違いない市の若い職員たちが得意顔で名付けたものと推測される、意味不明のカタカナ名の中身は、「〇〇教室」とか「〇〇の会」としてくれたほうが分かりやすい。

まず「オープンキャンパス」のほうから中身を幾つか紹介すると――。

「気軽にフラガール」「お試しバレエレッスン」「ベリーダンスダイエット」「バランスボールで健康を」「ストレッチヨーガ」「若返りヨガ体操（女性のみ）」「水彩画を描こう」「手作りパン教室」「気軽に着物を」「チャレンジ筆文字」「写経」「楽しい三味線」「段ボール工作」「四十代からのエアロビクス」「誰でも出来る気功」「海外ひとり旅英語」「はじめての韓国語」「航空券購入の基本」「すてきな生け花」「認知症予防睡眠力の鍛え方」「初めてのピアノ」「うたの広場愛唱歌」「クリ

スマスローズを咲かせよう」「手作りクリスマスカード」「パソコン教室」……。まだまだあるが、こんところでやめておこう。

もう一つの「プライベートカレッジ」は、『市民が学ぶ「オープンキャンパス」よりワンランク上のシステムのカレッジ』との説明書きがあった。人数を絞った中上級講座のようだ。

どんな中身かというと――。

「字幕なしで洋画を観たい」「歴史コミュニケーション」「さわやかな自己表現」「ザ・マジック」「和風ちぎり絵」「尺八」「三味線」「和布で小物作り」「着物リメイク」「生け花プリザーブドフラワー」「やってみようハワイアンフラ」「情熱のダンス・フラメンコ」「呼吸法とハーブ」……。

ふーんと感嘆の声が出るほど、かなり多様な講座が開かれている。

中身を整理すると、歌舞音曲がらみの「遊ぶ」「学ぶ」「鍛える」が中心。また中高年の女性市民向けとみられる講座が目立つ。

インスタント味噌汁のテレビ・コマーシャルで「暇なおかあさんはいないんですから」という文句を聞き、「うん、その通りだろうな。うまいことを言う」と納得していたところだが、以上の傾向からすると「昨今はそうでもないのかな」と考え直さざるをえない。

小さな地方都市でもスーパーやコンビニへ行くと、電子レンジ利用などで済む、手をかける必要のない食品があふれている。

他方、たいていの家には一通りの家電がある。衣服も使い捨ての時代だからズボンの破れや靴下の穴を繕うこともない。裁縫箱やミシンがあったとしても埃をかぶっている。大根白菜などの野菜の漬け物づくりも主婦の大事な仕事だったが、いまはスーパーへ行けば糖漬けでも浅漬けでも、悪くない味のものが並んでいる。

ひとむかし前と比べると主婦の家事量は間違いなく大幅に減り、自分のために使える時間が増えている。

近所の仲間と連れだってフラメンコやベリーダンスを習いにゆく時間をひねり出すことはさほど難しくないだろう。

と言っても、自由に出歩ける人ばかりではない。いや、こうした遊び、学び……を望みどおりできるのは一握りの限られた数の市民のはずだ。

当方の周囲を見回しても経済的理由から働けねばならぬ人たち、家族の介護や子育て援助に時間を取られる人たち、自分の健康面から自由のきかぬ人たちなどが沢山いる。

合わせて九十一にもなる田舎町の市民講座は結局、平和で豊かな国だからこそのもの。素直にありがたいことだと思い、誇らしい気持ちになってもいいのかも知れない。が、こうした講座に無縁の人たちのことを考えると、「オープンキャンパス」や「プライベートカレッジ」はもういい。ほかにもやることがあるはずだと、行政に注文をつけたくなる。

あるのか、ないのか

片岡義男
（作家）

ある、という日本語について考えてみた。問題とされているその物がどこかに存在していることを、ある、と言う。この、ある、の反対は、ない、というおなじくひと言だが、ありません、という言いかたが日本語には、ある。ある、という状態が、ません、と否定されているから、ありません、と言われれば、それはないのだ。

ありません、という言いかたは、じつはたいそう抽象的なのではないか、といま思った。なぜ、抽象的なのか。ありません、という言いかたは、ある、という状態を単に否定しているだけだ。ある、が否定されれば、ない、のだ。それだけだ。そこですべては終わる。あとは、現場ごとに、ふさわしい言いかたを身につけなくてはいけない。

ない、という抽象的な言いかたを、現場ごとに、そこにふさわしい言いかたに変えた上で用いないと、あの人の日本語はちょっとおかしい、などと言われてしまう。東京のとある地区で僕の友人がコンビニに入り、ここにはあるかな、と探していた物を女性の店員に尋ねたところ、ない、というひと言が返ってきた。笑顔にもならなければ、なくてすまなそうな表情やしぐさを見せるわけでもない。にこりともせずに、ない、と答えてそれっきりなのだ。日本語で育った人ではないのであれば、あるかないかを訊かれてそれがその店になければ、ない、と答えて当然なのだろう。

ないね。ないよ。ないの。ないってば。ないんだよ。ないなあ。ないと言ってるだろう。ないものはないんだよ。ないと言ってるじゃないか。ないわ。ないのよ。ないねえ。ないです。ございません、という言いかたもある。ございませんですねえ。見当たら

ない、という言いかたもある。ちょっと見当たりませんいがいかがいたしましょうか、などという言いかたは、ない、という状態を可能なかぎりやわらげて、相手に伝えようとしている。

以上のような言いかたには、そのひとつひとつに、それを使うにふさわしい現場というものが、はりついている。現場ごとに、ふさわしい言いかたがある。そのどれをも、人は覚えて身につけなくてはいけない。ふさわしくない言いかたをしないように、だ。日本人として日本で日本人に囲まれて成長していく現場というものが、いまなら三十歳くらいまで誰の身辺にもあるのではないか。日本語を学ぼうとする外国の人たちは、日本語の基本原理であるこのような現場主義を、相手にしなくてはいけない。

ない、という基本的なひと言に広くあてはまる、抽象化された文法のルールのようなものは、存在していない。だからこそ、成長していく日々という現場で、ふさわしい言いかたを、現場ごとに覚えていく必要がある。ない、というひと言にかかわる、共通のプラットフォームは存在しない。日本人はＮｏのひと言がなかなか言えない、という話をよく聞く。Ｎｏのひと言を使う場面が生活のなかにないからではないか、といまふと僕は思う。共通のプラットフォームはパブリックなものの典型だ。その典型が日本語にはない。

いつもの私鉄に乗っていて、車掌のアナウンスが僕の頭のなかに入った。駅に停車していたその電車が、「間もなくの発車となります」と車掌は言った。間もなく発車します、とは言わなかった。反射的に僕は思った。動詞を出来るかぎり使いたくない、という方針だと、間もなくの発車、という名詞がたやすく手に入る。「の」の一文字をこのように使うことによって、間もなくの発車、という名詞の状態が生まれる。そしてその名詞状態を発車という動きのなかに置くためには、となります、という絶妙な工夫がほどこされる。間もなくの発車となります、という言いかたはこうして出来上がる。

間もなく発車します、という言いかたと、間もなくの発車となります、の言いかたの違いを、どのように認識するか。意味はおなじじゃないか、というのが日常的な態度だろう。意味はおなじでも、言いかたは異なる。間もなく発車します、と言うなら、発車に車掌がごく近い距離でかかわっているが、間もなくの発車となります、という言いかたをすると、発車が間もなくであることは伝わるとして、車掌と発車とのあいだにある距離は、ずいぶん遠くなる。まるで人ごとのように、それは遠い。

ない、と友人が言われたコンビニで女性店員はどう言えばよかったのか。いまちょっとこちらには置いてないですねえ、申し訳ございません、とでも言うべきだったのか。ない、というひと言を、普通の日本語は、こんなふうに言うのか。店のなかでの客と店員、という現場にぴたりと合わせた上で。

おふくろの味

山本千明
（英会話講師）

誕生　昭和三年
永眠　昭和六十二年

母は「昭和」の初頭から終焉までを生きた文字通り「昭和のおふくろさん」だった。

正月の朝。長男の嫁として、母の小柄な体は「独楽鼠」のようにクルクルと動き続ける。元旦から次々とやって来る親戚一同をもてなす為に、座敷には「お節」が広げられ「熱燗」が並べられ、お勝手では「鍋」の具材が切り揃えられていく。表の戸が開く度に割烹着の端で手を拭きながら母は小走りで出迎えた。「明けましておめでとう！　よう来たねぇ！　まあ、上がりまい！」とお客を促す母の後ろで私はピョコンと頭を下げ、叔父や叔母の後から座敷までくっついていく。そこでお酒をついで回ると「千明、大きゅうなったのぉ。ほれ。お年玉や」とポチ袋が差し出される。ニコニコ顔で受け取ると私の「目的」は達成される。「世渡り上手」な兄は、そこから更に得意の芸を披露し始める。「花～も～嵐も～踏み越～え～て～♪」と歌いながら踊りだし「鳴いて～くれ～る～な～ホロホロ鳥よ～♪」のくだりで両手を背中に回し剽軽（ひょうきん）にパタパタさせるとヤンヤヤンヤの大喝采。ほろ酔いの叔父達の「おひねり」が四方八方から飛んで来る。皆の間を縫うようにお酌して回る母も、この時ばかりは手を止めてお腹を抱えて笑っていた。

厳しい明治生まれの姑に「おしん」の如く仕えながらも、愛情深く面倒見の良い母は、父の弟妹達から「姉さん姉さん」と慕われていた。

小麦粉、水、砂糖、膨らし粉。材料はいたってシンプルだったが、母の作るドーナツは出来上がるまでの音や匂いも御馳走だった。種を捏（こ）ねる間の、ほのかに甘い香り。油で揚げられる時のジュウジュウ、ピチピチという音と共にやって来る香ばしい匂い。出来立てをハフハフ頬張ると小麦と砂糖の優しい味が口一杯に広がった。

市販のおやつを渡される時は必ず目

を閉じさせられた。「ほーら。今日のおやつは何かなぁ?」と手に乗せられるのは、毎回マーブルチョコやキャラメルの類だったが、目をつぶるだけで何だかドキドキと胸が高鳴った。

風邪を引いて寝ていると、枕元に「ホットレモン」がやって来る。母の命名はお洒落だが、実際は庭に生った「だいだい」を絞り、砂糖を加えて熱湯を混ぜた「ホットレモン風飲料」である。ふうふうと息をかけ、まず一匙を口に入れる。キュッとなる酸味と砂糖の甘味が舌の上で同時に広がり、飲み干す頃には体がじんわりと温まっていた。

母が癌を患い、入院していた病院の窓からは、完成間近の瀬戸大橋が遠くにぼんやりと見えていた。

母亡き後、時代は程なく平成に移り、驚くほどの「進化の波」が押し寄せて来た。

黒電話は携帯に

郵便はメールに

スイッチ一つでお湯が沸き洗濯機から掃除機までが全自動。

「お節」は宅配で届けられ、お茶もおにぎりもコンビニに並んでいる

その革新的な平成の時代も、間もなく終わりを迎えようとしている。次にやって来るのはどんな「波」なのか。予想すらできないが、この便利な生活を「さらに進化させたい」という人々の願望に拍車が掛かっていくことは間違いないだろう。

しかし、よくよく目を凝らしてみると…

最新の電気炊飯器の目指しているものが「かまど炊きの美味しさ」だったり、デジタル文化の中で「レコードの音質」が見直されたり、昨年人気の朝ドラで取り上げられたのが「そよ風を再現する扇風機」だったり…時代が便利で無機質になればなるほど、人間はどこか本能的に「五感で感じられる何か」を求めたくなるのかもしれない。

昭和の母に育てられ、昭和と平成の二つの時代を股にかけて生きてきた「ハイブリッドな母親」の私は、昭和六十一年生まれの長女と平成元年生まれの次女の中に、確実に二つの時代が混在していることを感じさせられる。娘達は「もったいない精神」を核として持ち、地元スーパーで見切り品を買いながらも、ネットで様々な手続きをこなすことができる。

そういえば…料理好きの次女は、梅干しを漬けたり、お節の「田作り」や「栗きんとん」も上手に作れるツワモノだが、私は彼女にそれらの料理法を教えた記憶が一切無い。職人のように私のやり方を見て覚えたのか? それとも亡き祖母からの隔世遺伝的素質なのか?

ある日、突然に手際よく「梅酒」を作り始めた娘の隣で「それ、どうやって作り方覚えたの?」と思い切って訊いてみた。

即座にこんな答が返ってきた。

「クックパッド!」

ううむ。なるほど。そうきたか。